

畜産

実況

1 平成27年度第22回石川・福井合同肉牛枝肉販売会（平成28年2月8日）

		頭数	単価 (円)	販売価格 (円)	BMS (No.)	枝肉重量 (kg)	ロース芯 面積 (cm ²)	上物率 (%)
去勢	福井	12	2,469	1,187,907	7.2	479.8	58.8	83
	全体	30	2,429	1,129,517	6.4	463.3	56.5	70
雌	福井	7	2,060	843,412	4.6	408.3	51.4	57
	全体	9	2,175	896,969	5.2	411.1	54.9	67

最高価格は、1,491,387円、去勢牛(芳之国×百合茂×安平)、24.5カ月齢、A-5(BMSNo.11)、枝肉重量529.8kg、ロース芯面積58cm²であり、福井県産であった。枝肉単価は、前回より、去勢で11円安く、雌で330円安かった。

2 平成27年度第23回石川・福井合同肉牛枝肉販売会（平成28年2月22日）

		頭数	単価 (円)	販売価格 (円)	BMS (No.)	枝肉重量 (kg)	ロース芯 面積 (cm ²)	上物率 (%)
去勢	福井	12	2,522	1,254,896	7.3	495.9	61.3	83
	全体	28	2,560	1,241,724	6.7	481.3	57.6	79
雌	福井	8	2,338	1,010,223	5.6	435.4	57.0	75
	全体	12	2,448	1,039,455	5.8	421.3	56.1	75

最高価格は、1,791,942円、去勢牛(芳之国×安平照×平茂勝)、28.4カ月齢、A-5(BMSNo.11)、枝肉重量591.4kg、ロース芯面積70cm²であり、石川県産であった。枝肉単価は前回より、去勢で53円高く、雌で278円高かった。

対策

1 乳用牛・肉用牛

牛の流死産・異常産の予防について

4月の中旬に入ると、汗ばむほどの気温が高い日もみられるようになり、それとともに、カ、ハエなどの衛生害虫の活動が活発化する。このうち吸血昆虫と呼ばれるカやヌカカのなかには牛の流死産・異常産の原因となるウイルスを伝播（媒介）するものがあり、しばしば大流行して畜産経営に大きな被害をもたらすため、適切な予防対策を講じる必要がある。

感染は、異常産の原因となるウイルスを持っているカや、体長2mmほどのヌカカが牛を吸血することによって成立する。特に妊娠牛が感染した場合にはウイルスが母牛の胎盤を通して胎児に影響を与えて流産などを引き起こす。感染した母牛は無症状のことが多く、体型異常を伴う子牛を分娩して始めて気づく場合もある。

現在わかっている異常産を起す病名として、アカバネ病、チュウザン病、アイノウイルス感染症、ブルータングなどがある。チュウザン病、アイノウイルス感染症については本県での発生は確認されていないが、九州、中国、四国地方で流行がみられていることから、今後も注意が必要である。アカバネ病は妊娠牛が感染すると約30%に異常産が発生して、その異常子牛には四肢の関節湾曲や大脳欠損などの体型異常が認められるもので、本県でも平成20年度に発生した。

予防対策としては、牛を吸血昆虫の被害から完全に守ることは不可能に近いので、予防用のワクチンを繁殖雌牛や育成雌牛に接種する方法が最も効果がある。また、被害が

大きいと考えられるアカバネ病、チュウザン病、アイノウイルス感染症の3種混合不活化ワクチンが開発されている。カやヌカカの活動が活発化して病気を伝播する前に牛に免疫力を与える必要があるため、本県の場合は4月から6月ごろが接種時期の適期と考えられる。ワクチン接種は（社）畜産協会で行っており、計画的にワクチン接種することで、被害を最小限に押さえる必要がある。

2 豚

春先の哺乳豚の管理について

- (1) 暖かくなると哺乳豚の暖房に対して意識が薄くなりがちであるが、生後1週間以内の局所暖房は30℃以上に保ち、豚舎内も20℃以上を保持する。
- (2) 生後一週間が経過したころから下痢（特に大腸菌症）の発生が多くなるので、早期発見・早期治療を心がける。
- (3) ミルクの餌付けは、生後5～6日頃から行い、早くミルクになれさせる。ミルクは腐敗しやすく、また食べ過ぎると下痢の原因ともなるので、適切な量を、毎日給餌する。ミルクは水分が混じると固まりやすく、えさ箱に詰まりやすいので必ずチェックする。
- (4) 母豚の分娩間隔の短縮のため早期離乳が提唱されているが、離乳時の子豚が小さいと肥育期間に影響するので、離乳体重は6.5～7kgを目安にする。

3 鶏

採卵鶏の春期管理について

春期は、気温の日較差が大きく、一年のうちで舎内の環境作りが最も難しい時期である。このため、一般管理について以下の点に留意する。

- (1) 日照時間の延びと気温
徐々に日照時間が延びて暖かくなるので、産卵率は向上し、鶏の動作は活発になってくる。しかし、まだ寒さも残るので、舎内の温度差をできるだけ少なくするよう、カーテンや換気扇の操作はこまめにする。また、カーテンを開放するときは温暖な気象で無風状態のときに行う。
- (2) 飼料摂取量の増加
飼料の消費量は増加し、1日1羽あたり120g台まで摂取するようになる。鶏は、飼料が不足しても身を削って産卵するので、気付かずに過すと5月以降になって休産する場合がある。残餌をチェックしながら飼料給与量を調整する。
- (3) 乾燥対策
一年の中で乾燥し易い時期にあたり、ホコリの発生が多くなる。マレック病ウイルスなど病原微生物の中には、ほこりを介して感染するものもあるので、必要に応じて通路などに水を散布し、電灯や換気扇に付着したほこりは除去する。
- (4) 駆虫
気候が暖かくなるにつれて、ワクモなどの寄生虫の活動が活発となるので、観察して駆虫を実施する。